

西澤弥兵衛文書 — 森のお隣さん —



函館に関わる歴史資料の中に、一昨年リニューアルオープンした「旧金森洋物店」の隣に明治初期、店を構えた商人の資料が一括収蔵されています。まだ整理途中ですがその中の1点をご紹介します。

商人の名前は西澤弥兵衛。幕末に函館に渡ってきて明治になってから店を構え、明治30年に亡くなるまで函館で商業活動を行っていました。現在の「旧金森洋物店」の隣に店を構えたのは、明治2年9月付けの「貸地證文之事」という証文から明治2年以降であることが分かります。その敷地は「表口五間 裏行式拾間」の100坪程でした。当時の函館の一等地ですから、その地代も10カ年で「金三百四拾壹兩三分ト永銀拾六匁壹分八厘」とかなり高かったようです。

写真の資料は、明治2年4月付けの「往来手形之事」で江戸時代の廻船にはなくてはならない船の通行手形です。船の大きさは帆の大きさで表現されています。25反帆位で千石積み、それよりは一回り小さい廻船です。乗組員は船頭の弥兵衛を含めて8人。この資料から明治2年に西澤弥兵衛は自己所有船の「直乗船頭」ではなく、「大坂杉本町大和屋嘉蔵」の「沖船頭」いわゆる雇われ船頭であることがわかります。明治27年刊行の「北門名家誌」によれば、西澤は文久3年弁天町に店を借りるが明治元年の箱館戦争で罹災し、2年に末広町に家屋倉庫を建設し、3年に「業を航海に移す」とあります。しかし写真の資料から明治2年には大阪の商人の「沖船頭」を務めており、一定の利益を得たことから末広町に店を構えることになったものと思われます。しかし、末広町の土地を借りるにあたっては本人名義ではなく、江差にいる伯父(?)「西澤屋伝右衛門」名義で借りています。このことから明治2年段階では西澤弥兵衛の函館における地位はまだ確立されたものではなかったのではないかと考えられます。残存する資料から、西澤は後に船から下り道東や択捉の漁場に経営の中心を移していきます。

保科 智治

明治二年
四月
大坂杉本町
大和屋嘉蔵印
御役人衆中

明治二年
四月

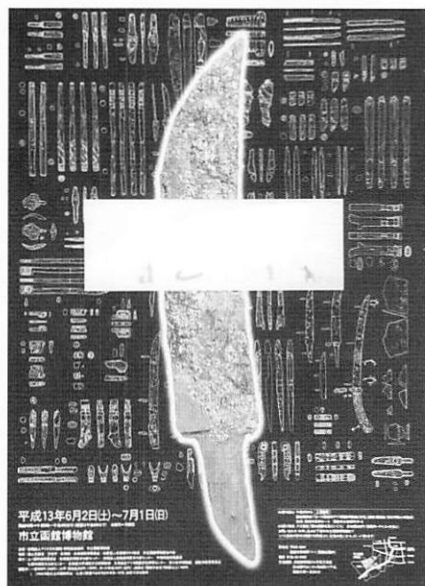
大坂杉本町
大和屋嘉蔵印

往來手形之事
一拾八反帆廻船壹艘 沖船頭弥兵衛
水主共八人乗
右廻船為商賣諸国江差下シ申候条
宗旨万端相改メ候所慥成者二紛無御座候
依之津々浦々無相違御通シ可被下候
為其往來手形仍而如件

往來手形之事

平成13年度特別企画展報告

長谷部 一弘

よみがえる北の中・近世
—掘り出されたアイヌ文化—

展覧会ポスター

平成13年6月2日から7月1日にかけて市立函館博物館本館を会場に、特別企画展「よみがえる北の中・近世—掘り出されたアイヌ文化—」が開催され、総勢1,977名の観覧者でにぎわいました。

この展覧会は、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構との共催事業として行われ、その後巡回展として苫小牧市博物館（7月14日～8月19日）、釧路市立博物館（9月1日～10月7日）において開催されました。

今回の企画展のねらいは、近年、全国的に注目されている北日本を中心とする中・近世世界の様相を歴史、民族、民俗、考古のジャンルにおよんで最新情報をまじえながら道内を代表する遺跡、事象に関わる資料によって展示紹介するものです。その中で上ノ国町勝山館跡、函館市志苔館跡、千歳市美々8遺跡、平取町ユオイ・ポロモイチャシ跡など相次いで発掘調査で発見されたアイヌおよび和人の生活用具は、これまで数少ない文献記録では解明できなかった北の中世世界の様相をよみがえらせ、これまでの北海道を中心とした北東アジアにおける中・近世世界の謎解きに一步踏み込んだ企画内容となりました。

また、今回の企画展のもうひとつの成果として、保存処理技術の発達による木製品、金属器などの出土資料の復元展示も見逃すことはできません。このような企画展の成果が、歴史、民族、民俗、考古をはじめとするすべてのジャンルで広く活用していただくことは言うまでもありませんが、それ以上に今後あらゆるジャンルの垣根を越えた新たな視点で北の中・近世世界を具体的に鳥瞰できる大きなきっかけになればと、慌ただしかった準備作業をふりかえりながら、ひそかに想うものです。

平成13年度特別展報告

佐藤 智雄

幕末の箱館と
幻の陶磁器
—箱館焼の世界—

平成13年度 特別展



展覧会ポスター

平成13年度の特別展「幕末の箱館と幻の陶磁器—箱館焼の世界—」は五稜郭分館を会場に、平成13年8月4日(土)から9月23日(日)の44日間開催され、延べ15,077人に観覧いただきました。

テーマに取り上げた箱館焼は、安政年間開港場となった箱館で造られた蝦夷地初の陶磁器です。現在の谷地頭町に窯跡の擬定地があり、早くから注目されていた函館ゆかりの資料でもあります。幕末開港場での「新名物」を目指したこの焼き物は、箱館をテーマにした図柄やガラス器写しなど独特の器種を持ち、誕生から終焉に至る歴史的な背景と希少性もあって、地元函館からはすっかり散逸してしまいました。そこで、今回の特別展ではまず箱館焼の存在を市民の方々に知っていただくことを念頭に、生みの親である足立岩次の作品を中心に「箱館焼」・「箱館焼以前」・「箱館焼以降」の3部に分けて特別展を構成しました。「箱館焼以前」には、蝦夷地の陶土で試し焼きをした作品を含め、箱館焼の基となった足立岩次の萩島焼初期の作品。「箱館焼」のコーナーでは五稜郭などの遺跡からの出土品を含めた北海道内に残された作品や足立岩次の故郷岐阜県瑞浪市、岩村町に残された箱館焼の作品を展示し、「箱館焼以降」では慶応2年、窯の再興を断念し故郷へ戻ってから明治10年頃までの作品を展示しました。また箱館焼誕生の背景として、箱館が諸外国との関係から開港場、国際貿易港へと発展していく様子を紹介しました。

箱館の最も光り輝いた時期に誕生し、戊辰戦争の終焉とともに消えたこの陶磁器は箱館と盛衰をともししています。今回の特別展で箱館焼の持つ独特の味わいとすばらしさを知っていただけたと思います。

平成13年度新収蔵資料展から資料紹介 蝦夷太平記の世界

今年の新収蔵資料展は7月24日(火)から9月9日(日)まで、戦争関連資料、デンプン製造工場を運営していた守田家の資料など、昨年度受け入れ分209件489点を一堂に集めて、市民の皆様にお披露目しました。

今回はこの中から「蝦夷太平記挿し絵」を紹介します。「蝦夷太平記」は昭和28年5月17日から10月31日まで、文章は寒川光太郎、挿し絵は梁川剛一が担当して、北海道新聞で連載されました。全165回の連載のうち、150枚の挿し絵が購入により当館所蔵となりました。15枚欠けているものの、梁川剛一の挿し絵原画がこれだけまとまって出てくるのは珍しいことでしょう。

梁川は以前にも「高田屋嘉兵衛像」を制作した函館出身の彫刻家として紹介しましたが、『少年倶楽部』などの雑誌や戦後の各出版社の名作全集を手掛けるなど、挿し絵画家として活躍したことは全国的に知られています。

寒川は本名を菅原憲光といい、北海道の羽幌町出身で、小学校教員の父親の転勤で樺太に移住しました。新聞記者や喫茶店経営などの後、『密猟者』で第10回芥川賞を受賞します。寒川の父親・菅原繁蔵は植物分類学者として知られ、彼の収集した「菅原コレクション」は寒川によって当館に寄贈されています。

函館ゆかりの道産子2人の合作「蝦夷太平記」は天保4年ころの蝦夷地を舞台とし、アイヌに育てられた和人の青年を主人公に、松前藩の内紛や和人とアイヌの対立をとりあげた北海道ならではの時代小説になっています。挿し絵原画は、鉛筆の枠内にモノクロで描かれており、枠外には各章のカットや新聞社の指示なども見られます。

後に「蝦夷太平記」は改題し、『荒野の剣士』として昭和33年に和銅出版社から発行されているそうです。興味を持たれた方は古書店などで探してみてください。

霜村 紀子



開会式後の特別観覧の様子



志海苔古銭に見入る観覧者



展示解説セミナーの様子



絵図に描かれた窯跡に見入る観覧者



梁川剛一が描いた「蝦夷太平記」挿絵の原画

平成13年度博物館講座報告

探検!!もっと知ろうよ函館山

この企画は、函館山の歴史的意義と自然の成り立ちに触れる講座です。歴史的視点から自然を眺めてみる講座とも言えるかもしれません。具体的には、函館山の自然環境の変遷とスギの植林、要塞の成立から終焉までを、スギ林や要塞跡を実際に観察しながら解説するものです。今回は、親子2組5名と、北海道教育大学函館校の学生17名の計22名が参加しました。観察コースは、旧山道を登り、千畳敷を目的地としました。参加者は要塞がどういうものか、なぜ函館山にあるのかを理解したようです。他に、千畳敷にある要塞の空気孔に、〈キクガシラコウモリ〉がへばりついてたという珍しい観察もありました。

佐藤 理夫



バスツアー 名画の旅

6月10日(日)、博物館講座バスツアーは初めて渡島檜山管内を出て、参加者46名は後志ミュージアムロードに向かいました。

下見の日は晴天で、車窓から眺める羊蹄山などの風景もまた名画だったのですが、あいにく当日は曇りときどき雨という天候のなか片道4時間の長旅になりました。

正午に倶知安町・小川原脩記念美術館に到着し、ご厚意によりロビーで昼食をとった後、矢吹館長のご案内で、小川原脩氏の作品と素敵な館の雰囲気をも十分に味わいました。次に、ニセコ町の有島記念館に向かい、有島武郎の農場開放の土地に立ち山崎学芸員の丁寧な説明を聞き、感慨深いものがありました。

霜村 紀子



ここほれ土器・土器!

8月7日、はるかに下北半島を望む穏やかな夏空のもと、函館市豊原4遺跡において、市内の小学生11名が体験発掘に挑戦しました。今回の体験発掘は、子供たちがふだん博物館でしか観ることができない4、5千年も前に使用された縄文時代の土器や石器を実際に発掘現場で発見し、掘り出してもらおうというものです。発掘担当者から当時の生活環境や縄文人の生活の様子に耳を傾けながら、夢中になって次々に掘り出される土器や石器に歓声をあげる子供たちの喜びようは、縄文時代にタイムスリップしながら、何よりもまして知識では得難い新たな発見と出会いを証明してくれました。

長谷部 一弘



科学おもしろ講座ーもしも原子が見えたならー

昨年度は、1月の寒い最中での実施にも関わらず、集会室から溢れるほどの賑わいでした。今年度は、夏真っ盛りの8月に行いましたが、保護者も加え、30数名という意外に少数の参加者でしたが、施設的には丁度よい数となりました。昨年には無かった、大形ビニール袋を使ったシャーベット作りやイチゴ味のアイスクリーム作りのパフォーマンスでは、ビニールを通した感触や、袋に溜まったガスが放出される光景に歓声が上がりました。ハイライトは1.5ℓのペットボトルを使ったドライアイスロケットです。博物館の屋根を超えるほどの高さまで飛び上がり、参加者から驚きの声が上がっていました。

佐藤 理夫



古文書調査講座

保科 智治

今年度博物館の通年講座に「古文書調査」が新たに加わりました。この講座は実質2年目で、昨年度立ち上げた「博物館資料活用ボランティア・古文書グループ」が母胎となっています。このボランティア活動は、「博物館に収蔵されている資料を一般市民の方とともに整理および調査研究し、展示や研究発表へとつなげていく」という目的で、手始めに古文書に興味のある一般市民の方や大学生を中心にはじまりました。

調査対象とした資料は受入のため整理を行っていた「西澤弥兵衛文書」です。西澤は近江国愛知郡出身で、函館では中堅クラスの商人だったようですが、その実態は全く明らかになっていない人物でした。約20回の整理作業を行い500点程の資料を封筒詰めしました。途中古文書の解説も行い、他の西澤に関する資料調査も行いながら西澤の人物像を少しずつ明らかにしていきました。

今年度諸事情により「博物館資料活用ボランティア」ではなくなり、一般公募による「ワークショップ」となり20名の募集を行いました。20名の方が応募され新たな活動を開始しました。「西澤弥兵衛文書」については前年度からの参加者に調査を継続してもらい、新たに収蔵資料の中から未整理の「酒谷家資料」(収蔵

番号500073)を追加調査することとしました。酒谷は加賀国橋立出身の北前船経営で財を成した商人です。

西澤資料については来年度には目録作成を行う予定でいます。酒谷資料についてはしばらく封筒詰め作業が続く予定です。細く長く続けていきたいと思っています。



読みやすい字を書いてよ!と思いつつ...

平成13年度博物館講座開催表

単 講 座

No.	講 座 名	開 催 期 日	参加者数
1	探検!!もっと知ろうよ函館山	5月20日(日)	22
2	春の星座観測(共催)	5月25日(金)	8
3	展示解説セミナー「よみがえる北の・近世・掘り出されたアイヌ文化」	6月3日(日)	8
4	バスツアー 名画の旅	6月10日(日)	45
5	七夕の星を見てみよう(共催)	7月6日(金)	43
6	夏休み自由研究(1)色を作って絵を描こう	7月22日(日)	15
7	親子で行く自然体験キャンプ(1泊2日)	7月26日(木)~27日(金)	8
8	夏休み自由研究(2)鉄道車両の仕組みとJR見学会	7月31日(火)	50
9	体験学習 こぼれ土器・土器!	8月7日(火)	11
10	北洋漁業と遊ぼう(共催)	8月7日(火)	91
11	夏休み自由研究(3)科学おもしろ講座 -もしも原子がみえたなら-	8月9日(木)	13
12	夏休み自由研究(4)五稜郭探検隊	8月10日(金)	20
13	体験学習 土器を作ってみよう(2回連続)	8月12日(日)・26日(日)	13
14	手作りおもちゃをつくろう	8月17日(金)	25
15	展示解説セミナー「幕末の箱館と幻の陶磁器 -箱館焼の世界-(2回)」	8月17日(金)・9月14日(金)	17
16	植物画を描く(3回連続)	8月25日(土)・26日(日)・9月8日(土)	8
17	秋の星座と中秋の名月観望会(共催)	9月7日(金)	11
18	クリスマスカードをつくろう	12月8日(土)	13
19	函館大火を知ろう	3月17日(日)	13

体験する土2・4講座(第2・第4土曜日開催)

No.	講 座 名	開 催 期 日
1	昔の函館を見よう-語る大正・昭和の絵はがきたち-	5月12日(第2土)
2	砂浜の漂着物を拾ってみよう	6月9日(第2土)
3	蓄音機を鳴らしてみよう	6月23日(第4土)
4	科学ミニ講座-ドライアイスで遊ぼう-	8月11日(第2土)
5	博物館資料に触れてみよう-大砲の弾は重いか?-	9月8日(第2土)
6	博物館はどんなとこ-ふだん見られない収蔵庫公開-	11月24日(第4土)
7	科学ミニ講座-パズルで遊ぼう-	1月12日(第2土)
8	生き物の冬越しを観察してみよう	2月23日(第4土)

ワークショップ(通年講座)

No.	講 座 名	開 催 期 日	参加者数
1	古文書調査講座	13年4月15日(日)~14年3月16日(土)	20
2	自然観察入門講座	13年4月22日(日)~14年3月10日(日)	32
3	四季の星空観測講座	13年5月25日(金)~14年1月25日(金)	22



ホームページ開設から1年

平成12年の12月末のホームページ（以後HP）開設以来6,386人（12月4日現在）のアクセスがありました。この数が多いと見るか少ないと見るかは議論の分かれるところです。当初の目標を1年間で1万件と漠然と設定していました。数だけで評価するののもどうかと思いますが、HP自体は見てもらうことが本来の目的ですから、閲覧数による評価はある程度必要なことです。以上の点を考慮して、目標の7割に達するかどうかですから、内容が受け入れられていないと言えるかもしれません。反省材料として、更新作業に取りかかれず、またイベント情報にある展示内容の更新遅れが目立ってきており、皆様にご迷惑をお掛けしております。さらに、早めに更新しなければならないカレンダーの更新が、当日になったりしています。新着情報も当初考えたよりもこまめに追加できずにいました。収蔵もできるだけ博物館の資料を閲覧できるように便宜を図りたいと思うほどに作業が進んでいません。この点が、閲覧数の増加につながらない理由なのかもしれません。

ただし、一方で、善意に解釈すれば、7,000人近くが閲覧してくれているとも言えるため、過大評価かもしれませんが、それなりに健闘しているのではないかと考えています。

最近、遅れ馳せながら収蔵情報の「函館市の文化財」74件のうち、74点（全画像77点）を貼付しました。さらに現在進行中ですが、大幅な画面構成の変更を予定しています。これは、現在の構成が巻物方式であるため、新たな情報を盛り込むのに、画面構成の変更を余儀なくされます。この手間を省くため、アルバム方式に変更中です。この修正を機会に、最新の情報もトビックスとして採用していきたいと思っています。この中には、現在北海道教育大学函館校に在籍している学生の協力で登録された博物館所蔵の絵はがき資料も閲覧できるように準備中ですので、請うご期待ください。

佐藤 理夫

市立函館博物館ホームページアドレス
<http://www.museum.hakodate.hokkaido.jp>

平成13年度新収蔵資料紹介

ここに掲載している新収蔵資料は、平成13年4月1日から平成14年1月31日までに受け入れたものです。

○寄贈資料

- ・やかん（金森屋号入り） 1件1点
 [札幌市・藤田 洋子氏寄贈]
- ・角巻 1件1点
 [函館市・小松 定一氏寄贈]
- ・和文タイプライター 1件1点
 [函館市・林 昭一氏寄贈]
- ・アトリ 他 5件5点
 [函館市・佐藤 理夫氏寄贈]
- ・昭和9年函館大火焼出銭貨 1件1点
 [名古屋市・加藤 茂雄氏寄贈]
- ・善行証書 他 2件2点
 [函館市・今井 文子氏寄贈]
- ・古川町木村番屋に関する資料 705件3,153点
 [函館市・外崎 亮子氏寄贈]
- ・写真 1件1点
 [函館市・田辺 ゆ当江氏寄贈]
- ・岩船呉服店商売繁盛祈願図 他 3件3点
 [函館市・岩船 ナヲ子氏寄贈]
- ・ボールを持った少年 他（金子幸正作品、遺品）一括
 [函館市・金子 孝子氏寄贈]

- ・船大工道具 1,875件1,875点
 [函館産業遺産研究会寄贈]
- ・異国船上陸風物見物始末 他 62件64点
 [弘前市・桑村 きよ氏寄贈]
- ・クロアホウドリ 他 3件3点
 [北海道渡島支庁寄贈]

○登録資料

- ・缶詰ラベル 17件17点
- ・[ギターを持つ少年] 他 4件4点

○参考資料

- ・北洋関係ビデオテープ 1件22点
 [東京都・(株)ニチロ寄贈]
- ・日時計 1件1点
 [函館市・山村 豊氏寄贈]

○その他の寄付

- ・コピー機・ワープロ 2件2点
 [市立函館博物館友の会寄贈]

職員の異動紹介

本館	管理係長	中川 強	（←五稜郭分館長）
	嘱託職員	山本 泰子	採用
	臨時職員	大島 保	採用
五稜郭分館	分館長	吉野 勝範	（←本館管理係長）
	管理係	紺谷 克孝	（←財務部納税課）
五稜郭分館から異動		寺島 祥行	

ー誌名SARANIP(サラニップ)についてー
 アイヌ語：シナの樹皮で編んだ袋。
 博物館情報や研究成果などをSARANIPに入
 れておき、その蓄積が今後重要な資料とな
 っていくようにと命名したものです。



SARANIPーサラニップーNo.41 2002.3.31発行
 編集・発行 市立函館博物館
 〒040-0044
 函館市青柳町17-1（函館公園内）
 Tel.0138-23-5480 Fax.0138-23-0831